博士論文要旨

論文題目：9/11 以降のフェミニズムの連帯
—ジュディス・バトラーのプレカリティの倫理とトニ・モリスンの可能性—
著者：五十嵐　舞

1．章立て

序論

1．問題意識の概要と論文のテーマ
2．研究の目的と先行研究における本研究の位置および独自性
3．研究方法・論文の構成

第 1 章　エイズ・アクティヴィズムの継承——『生のあやうさ』における倫理の端緒

1．9/11 以降の「喪」
2．「喪失」の悲しみから倫理をはじめる
（1）生の「あやうさ」をめぐる定式化
（2）倫理的共同体の基盤形成に通じるレトリック
3．倫理の端緒としての「喪失」
（1）「喪失」した対象との関係性への専心
（2）克服すべき課題とわたしの「喪失」の経験の（非）連続性
（3）あなたを「喪失」するときにわたしは
4．「喪失」からはじめる

第 2 章　運動の目標としての「喪」——『愛しい人が眠るまで』と『オールウェイズ』における遺された女性の欲望形成

1．遺された女性と恋人の再会
2．喪の達成の物語としてのプロット
3．次の交際相手の選択と規範の内面化
（1）喪の「完了」と再生産可能性
（2）「幸福に関する義務」を通じて
（3）90 年代のモノガミー規範と柔軟な適応の要請
（4）新自由主義下の規範と女性たちの喪の達成
4．順調に喪が達成されることの危険性

第 3 章　怪物性、障害、被傷性——「レシタティフ」における「グロテスク」のイメジャリと障害をもつ身体

1．「レシタティフ」における障害の表象
2．グロテスク性の意味
3．グロテスク性を付与する対象

4. 怪物の表象を付与する意味
5.「グロテスク」のイメジャリと障害をもつ身体
6. 被傷性の他者化
第 4 章　自律性の追求と他者性の承認――『ジャズ』における愛の選択と自主性
1. 愛に関する選択の自由と黒人女性のフェミニズム
2.「選択」できる権利の獲得
3. 身体と感情を所有すること
4. 他者性の承認と選択に関する自主性の主張
第 5 章　トニ・モリスンと 9/11 後のフェミニズム――『ホーム』における性暴力の加害
1. 性暴力の表象と 9/11 後の文学
2. 紛争下の性暴力としてのフランクの加害
3. フランクの罪の意識と償い
4. 加害に加担する黒人女性
5. 黒人女性と 9/11 後のフェミニズム
結論
参考文献

2. 要旨

9/11 以降、フェミニズムの言説がアフガニスタンやイラクへの米軍の侵攻の正当化に用いられ、アメリカの一部のフェミニストがフェミニズムの名の下にそれに賛同する。そうした問題を背景に、ジュディス・バトラーは、普遍的な倫理に基づいて連帯することが必要だと指摘する。しかし、黒人に対する差別などの状況を踏まえれば、個別の集団の問題関心に基づく運動の重要性も否定できるものではない。本稿は、そうした暴力に加担しないような 9/11 以降のフェミニズムの連帯の在り方を模索する。方法としては、普遍性の志向と集団の個別の関心に焦点を当てることに関する 9/11 以降のフェミニズムの在り方を、バトラーのプレカリティ論の批判及び、トニ・モリスンによる黒人女性の解放の運動を 9/11 以降の文学として評価することを通じて検討する。本研究は、インターセクショナリティの再評価など個別性への着目の意義が論じられる際に、9/11 以降のアメリカのフェミニズムを取り巻く情動の分断が鑑みられないのに対して、分断された他者との連帯の方法を示す意義がある。第 1 章と第 2 章で、プレカリティの倫理の体系を整理し、理論が抱える問題を検討する。それを踏まえ、第 3 章から第 5 章で、9/11 以降の暴力やプレカリティの理論の問題をモリスン作品の分析によって補完することを通じて、個別の問題関心に注力する運動の可能性を検討する。

第 1 章では、バトラーの『生のあやうさ』（2004）に収められた「暴力、哀悼、政治」をダグラス・クリンプの「哀悼と戦闘」（1989）と比較することを通じて、プレカリティの倫

理の概要を示すと同時に、レトリック上の問題点を検討する。バトラーはアフガニスタンやイラクへの攻撃に賛同してしまうような暴力に抵抗する倫理的共同体の形成を試み、愛し欲望した他者を喪失する経験とそれに関する考えがこの形成の資源となると主張する。こうした試みは、1980 年代後半のエイズ・アクティヴィズムの様子について論じた「哀悼と戦闘」といくつかの共通点をもつ。しかし、バトラーの主張には喪失の経験の記述においていくつかの問題がある。バトラーは、喪失の経験において、私たちは自律した存在でありたいというような欲望に反する、自らの根源的な他者との間の相互依存性に気がつくと述べる。しかし、バトラーが喪失の経験について論じる際に例に挙げるモリスンの『スーラ』（1973）とソフォクレスの『アンティゴネー』を再分析するとき、こうした状況においては、人々は喪失した対象との間の関係性に執着するかもしれないことや、喪失した対象に対する自らの依存性を甘受するかもしれないこと、そして、外界の出来事に関心を抱かない状況にあって、自律性に対する通常持っているとされる欲望を維持しないかもしれないことが明らかになる。したがって、バトラーのレトリックの前提は適切ではないと言える。さらに、「暴力、哀悼、政治」が示すようなコンテクストにおいては、9/11 後の国家の暴力に抵抗することは、エイズ危機で親密な他者を喪失したゲイ男性の経験とは異なり、喪失を経験した人にとって必然ではない。こうした状況を踏まえると、文脈の限定性なしに、喪失の経験を社会的暴力に抵抗するための資源として扱うときには、悲しみの感覚がもつ例外的で個人的な側面について見落とすことなく、社会的な問題と喪失の経験を接続する方法を考えることが（も）必要である。したがって、バトラーは社会問題と個人や個別の集団の間の距離感や葛藤を捨象するが、社会運動の動機付けや複数の集団の連帯には、そうした個別の距離感や葛藤などを踏まえた議論が、理論内在的に必要であることが導かれる。

プレカリティの理論は「哀悼と戦闘」同様、「喪」に服せないことを問題とし、哀悼不可能なものを哀悼する方法を模索する。すなわち、「喪」がある種獲得されるべきものとして位置づけられている。しかし、既にフロイトの喪の理論については、その異性愛中心性が指摘されている。第 2 章では、イギリス映画『愛しい人が眠るまで』（1990）やアメリカ映画『オールウェイズ』（1980）に描かれる恋人を亡くした女性の欲望の分析を通じて、哀悼に価値を置くことの問題性を検討する。両作品では、亡くなった恋人が女性のもとに帰ってくる。恋人の死後、女性たちは他の対象を愛することができない。こうした女性たちの様子は典型的な喪の反応である。しかし、再会を通じて、喪は遂行され、最終的に女性たちが他の男性と交際をはじめることになり、喪が達成される。

エイズ危機のさなかゲイ男性の道徳化が進む様子を、エイズの脅威とエイズや同性愛に対する社会の偏見の中でのメランコリックな反応としてクリンプは分析し、喪の重要性を説く。また、『権力の心的な生』（1997）などで禁止された欲望のメランコリックな体内化によって規範的なジェンダー・アイデンティティが形成されることを論じたバトラーは、プレカリティの理論においては、喪をある種の目指すべきものとして位置づける。しかし、作品分析からは、適切な喪の反応も主体に規範的な欲望を強いることが明らかになる。遺された

女性が亡くなった恋人との関係の中にとどまるのではなく、将来的に子どもを産み育てることこそが幸福な未来であるという価値観のもと、他の男性と交際を始めることを、亡くなった恋人が認める。こうした様子からは、喪のプロセスは同時に、恋愛から結婚を経て出産に至るといった「適切な」欲望の獲得を強いる過程でもあることが明らかになる。したがって喪が順調に遂行されることもまた、警戒すべき事象であり、規範化するのとは異なるような哀悼の在り方の検討が必要であることが導かれる。

第 1 章で示したように、アメリカは自らの被傷性を否定し、同時に、ムスリムをホモフォビックでミソジニーな被傷性をもった存在として表象したり、テロリストを性的・身体的に逸脱した怪物として描く。このような、被傷性をもった存在としての表象や、性的・身体的に逸脱した怪物というステレオタイプ化は、アメリカでは歴史的に黒人に行われてきたことであり、モリスンはそうしたステレオタイプの書き換えに挑戦してきた。第 3 章では、怪物化された人物や障害をもつ人物が描かれる「レシタティフ」（1983）におけるモリスンのステレオタイプへの挑戦の分析を通じて、怪物性や逸脱した身体のイメージを伴うステレオタイプ化や被傷性の他者化という暴力の批判に、モリスン文学が資する可能性を論じる。

「レシタティフ」では、障害をもつ人物とは別の健常な身体をもつ年長の少女たちにもグロテスクの表象が付与される。二人の少女は思い出話の中で、当初は年長の少女たちを「ビッグ・ガールズ」と呼ぶが、ある地点から「ガー・ガールズ」と呼び変え、年長の少女たちにガーゴイルのイメジャリを付与する。その付与の過程に注目し、グロテスクの意味、それが張り付けられた対象、及び障害の表象の機能を順に論じる。まず、作品において「グロテスク」が攻撃性等を意味する一方で、実際の年長の少女たちは、成長後の二人が克服した対象であることがわかる。二人は克服した対象にグロテスク性を付与する行為を通じて、機能不全の母親を想起させるような特徴をもった障害をもつ人物に対して抱く恐怖に抵抗しようとしていたが、結果的にその恐怖を克服できない。その拭い去れない恐怖の内容とグロテスクの意味の比較からは、障害の表象は攪乱可能性をもつと考えられるが、それはグロテスクだからではなく、むしろ二人の母親を介した近似性から、自らもいずれそうなるかもしれないという恐怖によるものであることが明らかになる。そうした、障害をもつ身体と健常な身体の近似性を暴き、怪物性と障害の身体をめぐる他者化とその動機付けとなる恐怖心を明らかにする「レシタティフ」が提示する構造は、ムスリムやテロリストのステレオタイプ化を通じて被傷性を他者化するアメリカの暴力の検討につながりうることが導かれる。

プレカリティの倫理において、バトラーは自律した存在でありたいという欲望を問題視し、自らが他者へと依存した存在であることを理解することが重要であると主張する。しかし、歴史的に自律性が奪われてきた存在にとっては、自律性を追求しないことは難しい。モリスンの『ジャズ』（1992）には、1920 年代のハーレムにおける愛する対象を選択する行為に関する自由の追求が描かれる。この性に関して選択する権利や身体に関する所有は、作品が執筆された 90 年代及び現在の黒人女性が直面する問題でもある。第 4 章では、愛する対象を選択することの自由という主題をモリスンによる黒人女性に対する性の抑圧からの解

放の運動として読むことを通じて、個別の歴史を踏まえた依存性の理解の方法を検討する。

作中では、黒人に選択する権利がなかった 19 世紀半ばと、選択する権利を行使する 20 世紀前半が対比される。20 世紀前半に選択する権利を主張し行使する黒人夫婦は、選択を通じて自身の身体と選択対象の身体の両方を所有しようとする。しかし、選択した愛の関係は崩壊し、それに伴い自らの身体に対する所有権も失う。その際に、両者は他者の身体を、暴力を用いてでも手に入れようとする。この動きは『ビラヴィド』（1987）で奴隷主が奴隷を追いかける図と重なる。『ジャズ』中にも奴隷主と奴隷の関係が描かれるが、それは「愛」ではなく単なる性的行為として位置づけられている。したがって、登場人物による過剰なまでの選択の行為の追求は失敗し、それは奴隷主と奴隷の関係性をも彷彿させるような暴力を呼び起こすことが明らかになるが、それはもはや定義上「愛」の関係ではなくなる。モリスンは一方的に選択する権利を主張し愛する対象の身体を所有するのとは異なり、自身の身体の他者性を受け入れた上で、選択対象の声を聴くという相互行為や、他者と隣り合う身体同士の接触としての関係性を提示する。しかし、そのように愛する対象を選択する行為がもつ暴力性と代替案を指摘しつつも、黒人女性が歴史的に選択する権利を奪われてきたことを踏まえ、モリスンは単純にその行為を否定しない。作品は、愛の選択の自由の魅力と、暴力性と、それに対する抵抗の必要性を全て提示する。それは、既にある愛の体系における黒人女性の権利の主張と同時に、その権利自体の在り方の変容を要求する多義的な実践であり、歴史的に自律した主体である権利から排除されてきた集団が、自律性幻想の暴力に向き合う方法を示すことが導かれる。

第 5 章では、中東の女性との連帯という視点から、9/11 以降の文学としてのモリスン作品の可能性を検討する。モリスンの『ホーム』（2012）では、朝鮮戦争で現地の幼い少女に性暴力をふるった後射殺した主人公が帰国後、白人医師に性的虐待をふるわれた妹を救う旅をする。作品に描かれる、朝鮮戦争での現地の少女に対する性暴力や、タスキギー梅毒実験を彷彿させる黒人の生殖器を用いた人体実験は、9/11 後の米兵の中東における現地市民に対する性暴力や、アブグレイブ刑務所における捕虜虐待を想起させる。『ホーム』に描かれる朝鮮戦争時の性暴力の被害と加害に関する描写を対テロ戦争下の暴力のアレゴリーとして読むことを通じて、対テロ戦争に欧米のフェミニズムが加担する問題に対するモリスン作品の可能性を検討する。

当初、現地の少女への加害を否定していた主人公は、しだいに自身が射殺したことを認めるが、性暴力に関しては、あくまでも差し出された誘惑に乗っただけであると考え、自らの罪を認めない。また、殺害に関する罪悪感は、幼い時に目撃したリンチで殺された黒人への哀悼へと置き換えられ、少女に対する哀悼や償いは行われない。こうした様子は、9/11 後の米国人被害者の死のみを哀悼し、中東の人々の死を問題とみなさない米国の態度と重なる。

対して、主人公の妹に対する白人医師による性的虐待に加担していた助手の黒人女性と、主人公の妹の手当にあたる黒人女性の共同体は、9/11 後の欧米のフェミニズムのとるべき態度を示す。助手の黒人女性が性的虐待に加担している様子は、タスキギー梅毒実験に黒人

看護師ユーニス・リバースが加担していたことと重なる。しかし、リバースが自身の罪を認めなかったのとは異なり、助手の黒人女性は、性的虐待への自らの加担に気が付いた後、自身の立場や能力を用いて、主人公の妹を主人公のもとへと逃し、加害行為への加担と決別する。手当にあたる黒人女性たちは、手当を共に行うがそれぞれの外見や話し方、医療の好みなどが異なり、互いの差異を尊重する。作品は、9/11 以降の米国の暴力性を指摘し、欧米のフェミニズムに求められる、加害への自身の加担を認め、差異を承認するような連帯を模索する姿勢を提示していることが導かれる。また、失ったものを別の対象で埋めようとするのではなく、悲しみにとどまり、失った対象を哀悼しつつ、受け入れ肯定的に生きていく主人公の妹の様子は、第 2 章で指摘した、スムーズに喪が達成され規範化するのとは異なるような哀悼の在り方を示す。

バトラーは、プレカリティの議論において 9/11 以降の欧米の一部のフェミニズムがナショナリズムに包摂され国家の暴力へと加担する可能性を指摘する。それは重要な指摘であるが、同時に、連帯を考えるには個別性の問題を無視できないことや（第 1 章）、哀悼そのものがもつ規範化の作用についても検討すべきであるという課題を抱えていた（第 2 章）。本稿では集団としての関心に焦点を当てるモリスンの作品を読むことによって、そうした諸課題に対して応答しうる可能性を検討した。その結果として、黒人社会の個別の関心を追求するモリスンの姿勢は、性的・身体的な怪物化や脆弱な存在としてムスリムを他者化する暴力に抵抗する力をもち（第 3 章）、自律した存在でありたいという欲望を手放せないことを否定せずに依存性を承認する方法や（第 4 章）、中東の女性たちと連帯する在り方、そして、規範化するのとは異なるような哀悼の在り方を示すことが導かれた（第 5 章）。こうした点からは、9/11 以降に欧米のフェミニズムがおかれた状況を踏まえても、モリスンの文学は暴力に抵抗する力をもつと言える。すなわち、個別の集団の歴史性を踏まえた運動によって、普遍的な倫理の基盤の志向を補完することで、より応答可能な 9/11 以降のフェミニズムの連帯が可能になるのだ。

9/11 以前の第三世界のフェミニズムに対するアメリカのフェミニズムの態度に関する研究との接続による「9/11 以降」という時代設定の相対化や、アラブ系アメリカ人作家とモリスンの比較によるアメリカの「他者」の連帯の検討など、今後の課題もある。しかし、バトラーのプレカリティの倫理のより応答可能な在り方のための課題を示し、同時に、哀悼そのものがもつ問題点を指摘できたことと、モリスン作品の 9/11 以降のフェミニズム文学としての可能性を示せたことは、バトラー研究とモリスン文学研究に資する。そして、それらの研究を通じて、被差別集団の個別の問題も無視できないと同時に、しかし個別の問題関心を追求することが結果的にナショナリズムに包摂されかねない状況の中で、普遍的なものを目指すことも必要な時代にあって、個別の問題関心に注力することが、連帯の土壌となる可能性を示したことからは、本研究は 9/11 以降のフェミニズムの研究に貢献すると評価できる。